

日頃、地域医療連携室へご支援・ご協力をいただきありがとうございます。

先日、地域のかかりつけ医の先生と主治医の光石先生とのオープンベッドの回診に立ち合わせていただきました。

在宅療養中の患者さんの病状を共有し、退院後の方針を決定することができ、スムーズな退院へとつながりました。そばにいらしたご家族も大変安心した様子でした。

今回、光石先生から、オープンベッドについて心強いご感想をいただきましたので、ご紹介いたします。

地域医療連携室 大沢 知佳



## オープンベッドを活用して

呼吸器内科

光石 陽一郎 先生

4月から平鹿総合病院の呼吸器内科に赴任しました光石陽一郎と申します。赴任して間もなく誤嚥性肺炎で入院されたAさんを担当させていただき、その際に地域医療連携室よりオープンベッドを利用してみても、と勧められ、最初はよくわからない中、手続きを進めていただきました。

Aさんはこれまで20年以上にわたって、澤口内科医院(横手市)の澤口常康先生をかかりつけ医として加療を受けられてきた患者さんです。澤口先生が訪室された際に、Aさんが入院後にみたことのない穏やかな顔で「ああ、先生」とおっしゃったのがとても印象的でした。Aさんのキーパーソンである息子さんもこちらにかかれており、Aさんの性格や息子さんの考え方などを直接伺うことができ、看護スタッフと話し合っていた退院へ向けての計画を、より具体的に進めることができました。特に経口摂取困難時の対応など、長くAさんとその家族との付き合いのある先生だからこそそのご意見を伺えて大変参考になりました。

急性期の総合病院にいと、外来で定期的に見ていない患者さんの場合に、その患者さんが入院しても普段の顔がよく見えないまま退院を迎えてしまうことがよくあると思います。その中でこのように普段のかかりつけの先生に来ていただいて、直接ご意見をいただく機会があるということは、我々勤務医にとっても退院へ向けての方針を決める中で大切なことだと思いますし、何よりも患者さんにとっていつもの先生にみてもらっているという安心感が生まれるのではないかと感じました。今回の経験を通じてオープンベッドは患者さんとかかりつけ医、そして病院の医療従事者が一体となって1つのゴールに向かうことができる理想的なシステムになりうると実感しました。今後とも機会がありましたら積極的に利用させていただきたいと思います。